



歌う綿毛と寂しが  
りやの歌



栞

## 歌う綿毛と寂しがりやの歌

---

空の奥には、本当に。宇宙が広がっているのかな。

さきは細い腕を天にぐう、と延ばしてぽつり。と洩らした。

真っ白なワンピースからは、棒のような二つの脚が生えている。その後ろ姿は、灰色雲の下では、まるで光のように。

さあ、NASAにでも聞きなよ。

黄と黒の縞々に背を預ける、その電柱は布地の上からでも冷たさが伝わり、じめりとした空気の中にいる私にとっては、とても気持ちがいい。

田舎の住宅街は、本当にひっそりとしている。

今にも降り出しそうな雨に、人々は早々に洗濯物を取り入れて、そう。っと部屋のカーテンを閉める。

三時になってすらいないのに、塀の向こうには、とぼとぼとした淡い橙が浮かんでいる。

生ぬるい風に寒気を覚えた私は、肩に羽織っていたショールを折りたたんでマフラー代わりにした。

白地に、桃色の小さな花柄が首を包む。この春の、トレンド。

目の前で、だらしないアスファルトの上を、枯木色のニットの靴下がふわり、ふわり。と舞う。

その、形の整った顔には、穏やかな笑顔が貼りついていて。

ほんとう、咲はつままないね。と、同じ音の名前を楽しそうに口にした彼女の甘いソプラノ。諭えるなら、そう。軽快に叩いたピアノのような、青い小鳥のような。

震える唇が、頭を傾（かし）げながら、ずっと。静かに。弧を描く。

セミロングの髪の毛は、子供の遊戯のような動きに合わせて、遅れ気味に、ふわり、ふわり。泡のような儂げな少女の下睫毛は何故か、少しだけ濡れていて。

(泣けばいいのに)

咲は知っている。

さきが、綿毛のようになるのは、かなしいときなんだ。って。

さきは知らない。

咲が、少しだけ冷たくなるのは、かなしいときなんだ。って。

言葉にするのが、億劫で。

君に、深く入って、傷つけるのが。嫌だから。

私は、さきの吐きたくなるのを、ひたすら待つのだ。

肩を、小雨が叩き始める。

積乱雲が地球の密度を下げて、息までもを詰まらせる。

耳に届くのは、猫の囀る歌ひとつだけ。

「さき。ブランコにでも乗ろうよ」

「うん、ブランコ、乗ろう。咲」

横に交し合った視線は、多分。根幹からずれていて。

歪（いびつ）でへたくそな気遣いをしながら、さきと咲は並んで歩く。

近づきすぎず、離れすぎず。お互いが、お互いを。欲しながら、恐れながら。

できたての雨は、鼻につうんときて、あまり好きではない。

この分なら、暫く降りそうだ。宇宙が果てしなく遠く見えるくらいに、銀河がなくなってしまうくらいに、分厚い。あまぐも。

雨が、もっと。もっともっと強く。激しくなれば、私にも君を泣かせてあげられるのかなあ。

-歌う綿毛と寂しがりやの声-

(泣かないっていうのも、ある種の逃避なんだよ)

その言葉が、言えなくて。ただ、彼女の真似をして、優しい顔で瞳を覗いた。

不器用なおともだち。私も、君も。似たもの同士ね。

いっつも白いワンピース。さきには、華やかなフラミンゴピンクも似合うのに。

## 宣戦布告

---

溢れんばかりの桜の花びらが、道の真ん中に敷き詰められ、まるでレッドカーペット。もちろん、これはチェリーブロッサムなのだけれど。

校門付近で、女子も男子も。皆が集まって、最後の別れを惜しむように会話に花を咲かせている。住宅街の真ん中であるにも関わらず、その声はただただ大きく、喧騒にしかっていない。だが、今日に限ってはご家庭からの苦情は少ないに違いない。

卒業式。三年生の、最初で最後の無礼講なのだ。最初かどうかは、人それぞれでもあろうが。

私も、もう高校生。

無意識にぎゅう。と証書の入った筒を握り締めた。感慨深いのと同時に、どこか、寂しい。

匂いも大分色付いてきた。ただ禿げていた木々にも、若草色が差されている。甘い匂いがする

。

「ゆうこ、」

背中に、友人の声がかかる。坂本はもう、下校したよ。と。

私の気持ちをよく知った、優しく、あたたかい黄色い音。

赤く眼を腫らした彼女に、情けない、と笑いながら、またメールするね、と頭を撫でて。

行ってくるよ、相棒。

格好つけて、大人ぶって。

後ろ手にさよならを。した。

途端、揺らしたセーラー服に、鼓動が早まる。

まだ近くにいるだろう。

一緒に帰った道、その夕暮れの景色を思い出しながら、精一杯に走る。頭上の太陽が、私だけを照らす。まるで専用スポットライト。

スカートのプリーツが内股に擦れ、少し熱を帯びる。

絡まる足に文句を言いながら、こき使われる革靴を酷く虐げて。

ああ、この角を右だ。

遠心力に外側を向こうとする体を無理やり内側に振（ね）じて。その瞬間に、おう。と、低い声がした。

声変わりしたばかりの、少し、ぎこちない喉。

そこには、読み飽きたラブコメディ漫画の一コマのように、一人自転車を引いて歩く、男子にしては髪が長い、少年。坂本がいた。

息を詰める。きう、と心臓が鳴いたりして。あ、う。なんて、纏（もつ）れた舌では何も、言えなくて。

浅田、お前、帰り道こっちだっけ。

……気やすく人の名字、呼ばないでよ。

辛うじて、震える唇が形にしたのは、可愛げのない、そんな言葉。

じゃあ、ゆうこの方がいいのか。という言葉に、馬鹿じゃないの。と軽く声を荒げ、視線を逸らした。

瞳に、幼さの残る川が映る。さらさらとした水音が耳元でくるくると回り、天に昇る。

少女らの話す声が遠くに聞こえる。これから、女性へと変わっていく、少女の。

蟻がアスファルトを進んでいく。触角を右に、左に、動かしながら、生きる術（すべ）を探して。

俺に、用事なんじゃないの。

沈黙を砕いたのは、先を促す、穏やかな台詞。

分かっているんだな、と思えるほどの微笑みに、腹の真ん中に生まれた自尊心が悔しがって。

「果たし状を渡しに」

学ランの胸ポケットをぐいと引っ張って、汗ばんだ手紙をぐちゃぐちゃに突っ込んで、即。逃走。

角を左に曲がったところで、あんたなんか嫌いだ！ と叫ぶだけ叫んで。

家までの道のりを、駆け足で踏みしめる。

こめかみに貼りついた長い前髪を横に分けながら、春風に乗った熱い頬の蒸気を、ぱたぱたと冷やした。

-宣戦布告-

カッターシャツが背中にぴったり。

この消耗は、まるで持久走の後みたいだなあ、なんて思いながら。

ていねいに描いた慕情に目を通し、狼狽する坂本正治を想像して、ちょっとだけ口元が横に広がって。

からん、から、ん。

学校の鐘が鳴っている。

桃色の絨毯は、気がつけば、いつも目の前に。

中学生って、ほら、ちょっとだけ背が伸びて大人顔したい年頃で。例えば官能雑誌にどきどきしながら手を出して、同級生の貧相な面を窺いながら背徳感に酔い痴れてみたり。どうせ人生なんて精一杯やっても無駄なんだぜ、とか悟ったふりをしてみたり。小難しい哲学書を流し読みして斜めに空（くう）を見上げて、含みを持たせたような溜息をついてみたり。

ミイコだってそう。それが幻想と気づかずにふわふわと「あんな男」と呟いている。好きでもなんでもないわよ、とは嘘ばかりで。

「素直じゃないね、ミイコって」

「嫌いよ、嫌い。太郎なんて嫌い」

すらりとスカートから伸ばした足は、生白い。少しずつ膨らみをつけてきた腿を交差させて、彼女は適当な机に腰かける。初夏の太陽は容赦なく照りつけ、捲りあげたカッターシャツの袖に陰影をつけている。茶色がかった細い髪が、否定ばかりを繰り返すミイコの頬を撫でる。

十四歳とは、色恋にもなかなか顎を縦に振れない年頃のことというらしい。いや、黒板の前の美少女軍隊らは随分と大声で初キスはどうだったかの、大学生の男に貢いでもらったのと小鳥のように囀っている。いろいろな十四歳（もしくは十三歳）がいるというわけか。にしてももう少し貞淑にはできないのだろうか、大体女性というものは……などと口にし出すと説教臭くつまらなくなってしまうのでよしておく。とにもかくにも元気なものだ、うん元気。

我らが噂の太郎君はこれまた元気にグラウンドでサッカーに精を出している。ありがちで二番煎じなスポーツ少年。ミイコいわく「汗だくになって、疲れ切った顔に滲む微笑みにキュン」だそう。残念ながら体育会系が苦手な私には理解し難い。し得ない。したくもない。

また、太郎君はいかにも普通の男の子である。ミイコがじいっと窓の下を見つめているけれど、他の子たちとはなんら変わらない、普通の細い目の男の子である。あえて特徴を挙げるとすれば、女子に話しかけると逐一真っ赤になるくらいには奥手というくらいか。鼻のあたりにそばかすがあって、まあ言われてみれば愛嬌があるような気もしなくはない。

ミイコは彼が好きである。太郎君は、知らずにいる。そういえば初恋は実らないものだと言いだめたのはどこの誰なんだろうか。告白したってその気持ちにけじめがつくだけで変わることはないのに。言ってしまうえばいいものを、と私は常々思う。

実る、実らないは関係ない。好きなら好きでいい。人を慕うのに権利も客観も存在しない。まあストーリーレベルになれば問題だけれども。

ミイコは好きで構わないんだよ、と口にしても、嫌、嫌、と男の手を振り払う女みたいな仕事で首を振って。すこおしだけカッチン。

怒らない、怒らないよ。ただちょっとだけわずらわしいだけ。耳元を飛ぶ蚊のように、ディナイを繰り返し続けるから。でもねそれなら目が合うだけで顔を辱に染めたりしなければいいのよ

。「私は、あんなやつ、だいきらい」  
「はいはい、言ってる」  
「信じてないでしょ、ミカ」

ん一、いや、信じてるよと棒読みで鋭い視線をすらりと流した。

お昼が終わる。

もう少ししたら、むわっとした空気が教室に充満するんだろう。するとまたミイコは頬を赤らめ、彼は下敷きでぱたぱたと顔を扇ぐ。

爪先立ちした子供たちが、子供じゃなくなってきた子供たちが、一斉に教科書を用意し始める。

後ろのドアから入り込んだ、ボタンを二つ開けたそばかすに、彼女はまたぼうっと見惚れて。

「素直だなあ」

何もかも分かった、上から目線で苦笑した。

おや、私もあんまり変わらない。ただの中学生だったみたい。

噓せるように濁った空気。

耳をつんざく、へりの音。

どこからか入り込んだ、蜂の横顔。

それらは時を留めたように動き回るけど、羽ばたきの数だけ命は近付いていく。

来年は受験生かあ、なんて。一步ずつ前へと進んでいく私たちの将来を見つめてみる。

何も見えない。

ただ、わからないけれど、ミイコが卒業までには告白できればいいなあ、と年相応のお祈りをした。

魔法よ、眠れ。

---

夢が、騒いでいる。

ほのりと焦げた恋心は、体の中で心臓を蹴飛ばそうとしているし、春の豊かな空気が気管に詰まって息が苦しい。

ひろ、む。

ただ愛しくて、やっと言葉にした名前。あなたの、名前。

こぼり、こぷ。と、溺れてしまいそうな私の背中に回した腕に、力が籠もり、掠れた吐息がきゆう。と漏れた。

いい、においがする。

香水などではない、彼の、匂い。石鹸の匂いでもなくて、ただただ生温く、穏やかで、拍動が穏やかになるように、鼻腔に落ちつく、それ。

私に擦りつけて、残り香。今だけはあなたのものでいてあげる、だから。

そんな言葉を、恥ずかしげもなく言えるようになっていれば、それは既に、夢の中。現実の中で泳ぐ。夢の海に。泳げずに、溺れてすらいる。沈む夢、に。

男性の標準の手よりも一回り小さくて、少しばかり歪な形をした手のひらが、こめかみから顎をするり。

瞳が合って。綴じた瞬間に、幼さの残る体温を重ねた。

「君は、おやすみ」

膝の上に頭を載せられながら、ああ、これでは立場が逆だ、とぼやけていく視界に、その頬笑みを見た。

いやだよ、と彼の短い髪をくしゃりと握って。私よりも大きな瞳が細まり、目尻に皺を深く湛（たた）える。

僕は、ここにいるよ。

甘い、大好きな声が降ってきて、頭の中でリフレイン。

そんなこと、言って。

「きっと、目が覚めたら、あなたはいないんだ」

ベッドサイドのカーテンが、風に揺らめいて、陽が差した。

その瞬間、白に消えてしまいそうな存在に、怖くなって。手を、伸ばし、て。  
確かに脈うつ指が、それを捉えて、慈しむように優しいキスをした。

「僕は、ここにいるよ」

せせらぎのような響きに、目蓋が重くなって。  
太陽のような視線と、ぎう。と抱きしめる体温に、意識は遠く。

鼓膜を、静かな吐息の音が震わせる。

-魔法よ、眠れ。-

淡い想いに終止符を打たないように、夢を見せたまま、永く。眠ってしまえ。  
焦燥にかられて、彼を引き留める私ごと、眠らせて。

離れたところから、木が揺れる声がした。  
耳元であなたの心臓は、まだ、動いている。

(私も、泣いた)

---

落とし穴は、いつ、どこに在るのか、わからない。

ぱ、ぱらら。

均一なようでいて、少しずつずれた、不思議な雨音。静かな旋律。

屋根の下で濡れることを拒んだ肩は陰の中。つい。とはみ出た右手の人差し指だけが、天国の涙を一粒掬（救）った。

服の皺の声。睫毛が擦れる。

乾いた唇が切れて、ほろり。アイアン。

灰色雲に、太陽は隠れて。遠く、とおく、届かないことば。

バスの時刻表は、風に押遣られた水滴に触れて、彼まで、涙。

傘なんて、置いてきてしまったから。どこかに、置いてきてしまったから。

地殻の上で這い蹲（つくば）る雨は、ずしりと重たくて。

心室にまで、積水。意識まで沈んでいってしまいそう。

ベンチの足に、蛙が貼りついている。粘液がぬめりとしていて、きゅるん。と瞳がそっぽを向いた。

裾の濡れたジーンズは、黒ずんで、重力に引き寄せられて。

そんな中。私はただ、うすぼんやりとした液晶から、意識を離していたかっただけ。

携帯電話の画面は、積乱雲が零したものではない、別の涙で滲んでいた。

安物の機種だから、簡単に水が入り込んで。晴れてもいないのに、一部が虹色に煌いていて。

目を逸らした、その文面は、「さよ　ら、ばい　い」。虫食いパズル。

落とし穴がまるでバケツのよう。

私を溺れされる気なのね、ひたすら落ちてくる、あめ。

(ひとつ、ほんとうにかなしさが一杯になったときには、)

流すべきものすら、流せないものなのね。

指が、膨張して、想いばかりがふくらんでいく。

ホースで一気に吹っ飛ばすように、ちっぽけな苦しさなんて、下水道に流れていけばいいのに

。

それでも流せない感情は、まだ、いつまでも、大切に。爪の先でころころと転がる宝石のようだから。

土に沁み込んで、堆積して。いつか。海のように大きなころろに変わればいい。

暖かな雨音は止まらない。

あなたを、思い出に出来る日まで。

穏やかな声で、蛙が泣いた。

歌が、聞こえる。

## おやすみのくちびる

---

もうこれで何回目だったか、唇をなぞった。私の脳よりもたくさんの記憶を持つ、言葉のでどころ。

あなたはもう、いない。

違う。

あなたの中に、わたしは、いなかった。

弛緩する体、舌に溢れる思い、人差し指の腹だけが意思を持ったように一つところをするりと滑って、流れた。

そらは高くて、あおい。

酷く乾いた喉に押し込めた唾液は、すこしぬめっていて、そのまま肺を満たして心臓を止めてしまうのではないかと思った。きしきしと乾燥に悲鳴をあげる髪の毛は、願掛けと称して腰まで垂らしたまま。

きみのしあわせをいのった。

淹れたての紅茶をすする。  
唾内に刺激物。小さな火傷。

唇をなぞった。ひりひりとするのは、いったい、なんのせい。

きみのしあわせをいのるよ。

目蓋があつくて、窓から天を見上げた。じんわりと瞳をつつむ涙が、綴じた睫毛に陽光を映して、ほのり薄赤色。

## まっしろ世界にとけてゆく

---

ぼくたちのみつめる世界は、とてもしろい。

こおりがつめたくて、何十年も前まではふわふわの雪が積もっていた。歩いてみるとそれはぎゅう、と硬くなり、ぼくは小さいころ、しばしばかたまりを食べて、ともだちに笑われた。今はだいぶ、いなくなってしまったのだけれど。

この数年、まっしろい、それでも何か靄のかかった天国からは雨しか降ってこない。代わりに、海が広がった。そして、ひとびとが帰っていった。ふわふわの雪がなくなって、灰色の雲が分厚くなっていった。

息は濁る。なのに、その呼気はうすっぺらい。

「なあ、あったかいと思わないか」

幼馴染のかれは、柔らかな背中を濡らして、こちらを見ずに言った。かれの後ろ姿は、昔よりもちいさい。つよくて、つよくて、憧れたおにいさん。肩の上下が、浅く、回数が多くなっている。

「うん、あったかい」

氷の上に腰かけたぼくたちは、ちらりと視線を交わす。振り返ってかれは、なんでだろうなあ、とわらった。

「おれたちは、なにか、悪いことをしたか」

ちからのない声が、くるくると空気に抜けていく。

丸い黒い瞳は、夢を見ているように穏やかで、寂しげだ。

「してないよ」

きっと、とつけ加えて、ああ、かれもだ。と、ぼくは軋んだ心臓にからだを弛緩させた。

## きせきのこども

---

溜息をついてしまうのは、我が子の額を撫でながら。きゅうと濃い眉に、つるりと広い額。ころんとした丸い瞳に、深いふかい二重。右の唇の上にはちょこんと零れた黒子。鼻と肌の色だけは、私に似て小さく、少し褐色。膝の上で、幼い男の子は、くう。くう。くう。穏やかな寝息を立てて、ぽっこりお腹を上下させている。

引き戸を開いた縁から差す陽光は、目を細めてしまうオレンジ色。畳は色褪せて、白くなっている。私と、この子。べたべたと、汗が髪を絡め取る。こめかみの滴を肩で拭い、また。ばた、ばた、と団扇で坊やを煽いで。

ほんのときどき、頭上で揺れる風鈴に、鉄の匂いがした。

煙漂う蚊取り線香。おとうさんは何時に帰ってくるのかな、なんて。ぐっすりとした寝顔に声をかけてみたりして。首筋を流れた老廃物は、水分とともに谷間を下って、腹のあたりでシャツを濡らした。

無意識下に母を呼ぶ声を聞いて、我が子の目蓋をそっと撫でた。睫毛の長い、ちょっと不細工な男の子。ふしぎやふしぎ。まかふしぎ。

あなたは、私がいくら望んでも一つになれない彼と私の半分こ。まだまだ小さいのに、誰かさんに似て我儘でやんちゃな普通の子供。子供って不思議なものね。育てるはずが、こっちが学ぶことばかり。

もう少し大きくなったら、原石を抱くような気持ちであなたとはじめましての挨拶をしたことを教えてあげましょ

う。今は団扇に涼みながら、私たちによく似たふっくらほっぺたを熱に浮かせて、静かに、おやすみ。

午前五時の五分前。開いた窓の肌寒い感触に、ぷるる、と。こころが震えた。

お昼の雲は高い。

このもっと遠くに宇宙があるだなんて、信じられないくらい分厚いコバルト。とても濃くて、明るくて、まるでポスターカラーが真っ白なキャンバスを塗り潰したような色。

庭には小さな花畑。今は蒲公英が強く根を張っていて、ごく数本だけが綿毛を穏やかな風に揺らしている。

幼稚園のころは、この家と幼稚園だけがわたしの世界だった。狭いせまい、ちいさな箱の中をうろちょろしてやまない、若干一メートル八センチ。

それでも毎日が不思議の連続だったことを覚えている。

小鳥がちいちい騒ぐから、重たい目蓋を丸い人差し指でござとこすって、お布団の中をもぞもぞするのだけれど、大好きなおとうさんは隣にいない。何よりも目覚めた瞬間は「なんにもないところ」にぽつねんと生まれてしまったような気がして、居間から漂ってくる苦そうなコーヒーのにおいが、迷子になっている幼いわたしを蛍光灯の下に引きもどしてくれた。

今はもう押入れの隅っこで休んでいる、お役御免になった黄色の小さな通園かばんには、鼻と涙でぐちゃぐちゃに濡らしたミニタオルだとか、運動会で汗をたくさん吸ったはちまきとか、年長になったときに嬉しさ反面ちょっとだけ寂しくなった、チューリップの形のワッペンだとか。そんなものの気配と、物心つくか否かの間に溢れさせたきどあいらくが、冬物の服を仕舞うポリ袋のようにぎゅうぎゅうに詰まって、破裂しそうになっている。

自分と他人、を認識しだした小学校中学年。放課後に、内心すきだった男の子が逆上がりの練習に付き合ってくれた。

こっそりと遊びに行くことを覚えた遊び盛りには、たった一人玄関の外に出るだけで冒険のように思えて。背伸びをしてデパートのエレベーターに乗って、おねえさんに「三階お願いします」と上ずった声で言ったものだから、「おつかい？ 偉いね」とキャラメルを一つ貰ってしまった。子供じゃないのに、と二十センチにも満たない靴を覗みながら噛んでいたキャラメルは、甘くて上の歯にしつこくこびりついた。

夕日が傾いて行く様子をガラス越しに見て、ちょっとくらいいいかと沈みかけにドアを開いたら、おかあさんにこっぴどく叱られた。あの赤らっつらは今も変わらない。おとうさんだけがわたしの味方になってくれたけれど、今となっては、それでもやっぱり心配だったんだろうな。と、今朝がた彼に乗っていかれた自転車の隙間を見て思う。

どうしてだろう。

大学の講義がたまたまおやすみで、ラッキー。なんて考えていたら、日曜日の子供よろしく随分と早く目が覚めた。

かび臭く部屋に籠もるのもなんだか嫌になって、こうして家の外を歩いている。言うなれば軽いお散歩。

久しぶりにコンタクトをつけた瞳には何もかもが鮮明で、ぶろろと通り過ぎたバイクの上で翻る薄手のコートだったり、塀に戯れる蝶の黄色だったり、気の早い蛙の鳴き声だったり、ご近所から漂ってくる昨日の晩の肉じゃがの残りの匂いだったり。とても些細なことを丁寧に咀嚼する自分がいて。静かに、ゆったりと響く時間の余韻に体を傾けると幸せの音色。

すると、どうしてだろう。こんな甘いひとときに、見つめてしまうのは昔のことばかり。

今も昔も幸せのはずなのに、どうして幼いころを思い出すとこんなにもきゅうと切ない気持ちがうまれるのだろう。

何かもどかしい気持ちが生まれはじめたのは中学生のころ。

今度こそ、多分今度こそ本当に初恋で。馬鹿みたいにまっすぐに告白をして、振られて、泣いた。なのに嬉しかった。本当にこの人が好きだったんだなあ、と実感できたから。今でも好き嫌いのメカニズムは分からない。ぐだぐだと矛盾したのが人間ってものだ、と格好つけて考えだしたのも、だいたいそれぐらいのお年頃。

それなりに恋、とか友情、とかそんなものに触れて、同時に大人の階段を否応なしに登り始めたティーンエイジ。周りの男の子たちは女の子の膨らみにばかり目が行って、女の子はというと、まだ棒みたいな足をお姉さんぶって露出して、トイレでメイクをしてみたりして、なんだかみんな、私も含めてまだまだちびっこだった。私はというと、中途半端に悟りを開いて、ああもうこの世は終わりだなんてノストラダムスよろしく陰鬱な日々を送っていたのだけれど。それも高校受験だとか、高校に入れば大学受験だとか、忙しい毎日を送るうちに吹っ飛んでなくなってしまった。

格好をつけることにくたびれ始めた高校時代はそう、平和主義。今と大差ない私。

大人びていたのか、成長しないだけなのか。まだまだ若い私にはわからない。

けれど、いつのまにか手にした柔らかな気持ちは、きっと、ずっと、離さないのだろうと思うのだ。

横断歩道を不意に横切った三毛の目は、琥珀色にきゅるりとしていた。

雲一つない道をわたしは歩く。隣に並び列を成す、蟻の行進を乱さないように。

一日いちにちは、そう変化のない二十四時間。

ひとたび呼吸をすれば、いきものは皆、止まるために生きるのだと気づく。

そうすると、どうして寿命があるのかと考える。露草に留まる蜘蛛だって考える。答えは分からない。たった一つ言えるとしたら、限りあるから大切なんじゃないか、なんて使い古された陳腐な言葉。あながち間違いでもないんじゃないだろうか。

歴史の教科書に載るのは、数え切れない歴史の、ほんの一部。遠くでががあがあ騒ぐ鳥だって、市民病院でたった今生まれた赤ん坊だって、過去の積み重ねで現在にある。

パラボラの向こうを伸びてゆく飛行機雲。死角の入道雲からぐううと引っ張られて、まっすぐに筆に乗る。飛行機もそう。めいっばいの過去と未来に囲まれている。

まいにちは昼、夕方、夜、と循環する。その中で元気に活動する幾億のしんぞう。

変わらない刻（とき）なんてない。一瞬、いっしゅん、まるで奇跡のようなめまぐるしいメリーゴーランド。

呼吸が深くなった、数時間前。

それは午前五時の五分钟前。

開いた窓の肌寒い感触に、ぷるる、と。こころが震えた。

四角い世界は、うまく言葉にできないくらいに幻想的な景色だった。

うすらと闇の残る青空に、ぽっかりと白い小さな月。それは半分透き通っていて、テレビで何度も見た珊瑚礁の海のような色をしていた。

鼓膜に優しい、小鳥の囀りが眠気をすうと引かせてくれる。

愛用の毛羽立った膝掛けを肩に、ただひたすら、見上げていたくなった。

朝がくる。

暗闇から、真っ白な朝がくる。まっさらな今日の始まり。

肺一杯に満たした空気は、冷えているのに緑の匂い。

電線のシルエットがくっきりとしていて溜息をつきそうになる。髪を撫でる、子守唄。

まだ眠る、くらいくらい家たち。

これから少しずつ見えなくなってしまう月に思いを馳せながら、今朝もまた、昔のことを考えていた。

平凡な人生。先のことはまだよくわからない。

それでもまいにちは、昼、夕方、夜、朝、と循環する。

そのなかで、わたしたちは、迷ったり、矛盾したり、ほくそえんだり、心から笑ったり、たくさんの感情と出会うのだろう。

わたしは思う。ひとときとして、同じ感情に出会うことはないのだと。

わたしは思う。同じものなんて、きっと、この世にはないのだと。

出る杭は打たれるというのなら、皆が皆打たれなければならない。だって、別の個人なんだから。

きみとわたしの悩みは似ていて非なるものなのかもしれない。それすらわかっていながら、それでもいっしょに胸を借りあえばいいじゃないか。

ぐちゃぐちゃに流されたり、そうかと思えばほっと小さなことで幸せと温もりを感じたり。不器用で案外図々しい生き物でありたい。

だからときどき整理する、昨日のことを思って、明日のことを案じてみる。足踏みも邁進もどっちも大切な要素だから。

太陽よりも月がすきだ。

寝顔を静かに見守ってくれる気がする。

安心感をくれる第二の母親みたいなものかな、なんてことを考えながら、今。おやつの間を私は歩く。

父親みたいな太陽は、あと二カ月もすれば蝉の合唱を楽しそうに聴き始めるのだ。

月は見えない。光に遮られているだけで、きっと、すぐ近くにいる。

ぷるる、と。こころが震えた。

今日の私はどこかおかしいなあ。

そう一人呟いては、また、押入れの通園かばんのことを、想っている。